故郷 (7)

魯迅
竹内好 訳

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

帰郷	母との対面	ルントウの思い出（回想）
真冬のある日 厳しい寒さの中、「私」は、古い家を明け渡すため、二十年ぶりに故郷に帰った。故郷のわびしさに寂寥の感が胸に込み上げた。	**明くる日の朝早く** 「私」は家で、母、甥のホンルと対面した。母から、ルントウが「私」に会いたがっていたと聞いた。	・脳裏に繰り広げられた不思議な画面 紺碧の空に、金色の丸い月。銀の首輪をした十一、二歳の少年（＝ルントウ） ・ルントウと知り合ったとき（三十年ほど前） 「私」は十歳くらいで、家の暮らし向きも楽だった。ルントウは「私」の家の雇い人の息子で、正月に家に来たルントウと、「私」はすぐに仲よくなった。 （ルントウとの会話） チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャー。 ルントウの心は神秘の宝庫で、高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけの「私」や遊び仲間とは大違いだった。

ヤンおばさんとの再会	ルントウとの再会	旅立ち
「豆腐屋小町」とよばれていたヤンおばさんを「私」は見忘れてしまっていた。ヤンおばさんは「身分のあるお方は目が上を向いている」と言い、その後、母の手袋をズボンの下にねじ込んで出ていった。	**ある寒い日の午後** 「私」はルントウと再会するが、その姿は記憶にあるルントウとは似もつかなかった。ルントウの「旦那様」という言葉に、「私」は、悲しむべき厚い壁が二人の間を隔ててしまったのを感じた。 ルントウの子・シュイションは、ホンルに誘われ、うれしそうに遊びに出ていった。	**旅立ちの日** 「私」たちは船に乗って旅立った。ホンルの「シュイションが……遊びに来いって。」という言葉に、「私」も母も、はっと胸をつかれた。 ・「私」の思い 「私」は、若い世代が「新しい生活」をもつことを希望する。まどろんだ「私」の目に、紺碧の空、金色の丸い月が浮かぶ。「私」は、希望とは地上の道のようなものだと考える。

確認テスト　教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「私」の母は、「私」とともに二十年ぶりに故郷を訪れた。
イ ホンルは「私」の息子で、「私」の帰郷を庭先で待っていた。
ウ ルントウは「私」と三十年ほど前に出会い、仲よくなった。
エ シュイションはルントウの甥で、ホンルと仲よくなった。

〔　　〕

(2) 次の各選択肢を、回想の場面と現在の場面に分け、記号で答えなさい。

ア ルントウの顔は深いしわが畳まれ、目の周りが赤く腫れていた。
イ ルントウは艶のいい丸顔で、毛織りの帽子をかぶっていた。
ウ ヤンおばさんの立った姿は、まるでコンパスのようだった。
エ ヤンおばさんは顔におしろいを塗り、一日中座っていた。

回想の場面〔　　〕
現在の場面〔　　〕

(3) 次の中から、「私」が新しい生活をもってほしいと願っている「若い世代」に当たる人物を二人選び、記号で答えなさい。

ア シュイション　イ ホンル　ウ ヤンおばさん
エ ルントウ　オ 「私」

〔　　・　　〕